



NPO法人 大谷石研究会

大谷石の魅力を全国のみなさんへお伝えする大谷石研究会の広報誌

# 石のまち「西根の集落」を歩く

NPO法人 大谷石研究会  
理事 岡田義治

大谷石建築の集落として知られる徳次郎（とくじら）・西根地区・旧街道には、20戸余りの民家、蔵、塀が連なっている。



■徳次郎・西根地区・旧街道

この石、大谷石の名で産出されたが、地元では徳次郎石または西根石として区別されている。その歴史は古く、室町時代の起源説もあり、新里く徳次郎く大網などの山中から採掘された。特に半蔵山、男抱山などからの徳次郎石採掘が知られている。近年、企業化・機械掘も行われたが、昭和50年頃には会社が精算され、平成2年には地元の石工による採掘の歴史を閉じている。徳次郎石を使用した建築で、現存する最も古い例は一八六〇年代に造られた蔵で、木造の軸組に、板状に加工した石材を和釘や鋸で固定したものが多く、この板材の繋ぎ目を、漆喰の覆輪目地で覆う海鼠目地が一般的であるが、中

には石材に面を取り、鋸で止めて目地処理をしないものなど、工夫のあとも見られる。石を固定する「和釘」は粘りが必要で、徳次郎宿に質の高い「鍛冶職人」がいたことを物語っている。木造の軸組に張った石材の



厚さは、約一寸から三寸位に加工されたものが多く、輸送手段の改善とともに、十五cm〜三十cmの厚さの石材を積上げる石造建築となった。それは明治の後半頃になってからで、窓の周囲に洋風建築の意匠・装飾を付ける蔵が出現する。



■板蔵に石を和釘で止め、目地処理をしない蔵。窓廻りは和風の意匠  
「徳次郎石の瓦は百年とも云われた。また、和・洋風の建築意匠、装飾などを刻むに最適な硬さ、加工性にも優れ、それぞれの部位に用いられ重宝された。西根集落で使われている石は、もちろん徳次郎石が最も多く、ほかに大谷石や新里石なども使われている。この集落に石の建築が多い理由として、「一度重なる大の歴史」が伝えられている。それが事実としても、石の建築による町並みを造るには、木造の建築を造るより遙かに長い時間が必要だと思われる。材料の確保、加工や施工を行う人の手配、資金の調達、どれをとっても一朝一夕には不可能なものばかりである。おそらく、何らかの契機により、長い時間により住民の共通の意識・理解が生まれ醸成されたに違いない。」



■板蔵に石を縦横交互に張り、海鼠目地とし、前面に庇を付した蔵  
徳次郎石は、一般に大谷石より木目細やかで、青色・白色・美しい光沢が

見学した当日、西根は桜花爛漫の季節ではあったが、冷たい雨が石瓦を叩き、強い風が吹き抜けていった。

あり、耐候性にも優れていた、といわれる。特に基礎や石瓦に用いられ、「徳次郎石の瓦は百年とも云われた。また、和・洋風の建築意匠、装飾などを刻むに最適な硬さ、加工性にも優れ、それぞれの部位に用いられ重宝された。西根集落で使われている石は、もちろん徳次郎石が最も多く、ほかに大谷石や新里石なども使われている。この集落に石の建築が多い理由として、「一度重なる大の歴史」が伝えられている。それが事実としても、石の建築による町並みを造るには、木造の建築を造るより遙かに長い時間が必要だと思われる。材料の確保、加工や施工を行う人の手配、資金の調達、どれをとっても一朝一夕には不可能なものばかりである。おそらく、何らかの契機により、長い時間により住民の共通の意識・理解が生まれ醸成されたに違いない。」



■横張り石の位置を妻面と桁方向で違い、目地以外に和釘を打ち、漆喰留めした蔵





地下採掘場 石の里希望 大谷石体験館 パルモール内@おおよ

大谷石産業株式会社は大谷石を使った暮らしのご提案をしています。

## 大谷石産業株式会社

本社 〒321-0345 宇都宮市大谷町1196-2  
TEL 028-652-5171/FAX 028-652-1851  
<http://www.ooyaishisangyo.com/>

真言宗智山派  
下野の霊場

# 多氣山不動尊



〒321-0343 栃木県宇都宮市田下町 563  
電話 028-652-1488 FAX 028-652-8098  
<http://www.tagesan.com/>  
E-mail [tagesan@crux.ocn.ne.jp](mailto:tagesan@crux.ocn.ne.jp)